二〇二二年六月一七日

ほうたるの消えて魑魅の闇深し　うつぎ
短夜の夜半の地震に目覚めけり　千鶴
漂流記胸に抱へて籐寝椅子　素秀
家並を逆さに宿し植田澄む　せいじ
境内に風のみちあり夏木立　澄子
ぴん札を数ふ指先見て涼し　ひのと
朝刊に湿る手ざわり半夏生　みきお

二〇二二年六月一六日

女湯の妻を待ちをり百日紅　ひのと
青葉陰心の財を彫る石碑　もとこ
蜘蛛の囲に珠の連なる雨上がり　むべ
草刈ればなほ広々と遺跡の野　あひる
万の甕黒酢を醸す大南風　凡士
北山の青楓添ふ京料理　たか子

二〇二二年六月一五日

大根おろし舌にぴりりと夏めきぬ　宏虎
日時計は石へ還りぬ五月闇　ひのと
沢蟹の入水さながら岩落つる　素秀
青空を掃きゐる風の合歓の花　豊実
ゴム長の足跡埋めて蝌蚪の群れ　なつき
石灯籠頭隠れし茂りかな　もとこ
宵宮の神迎えなる笛の音　素秀
揺るぎなき悟りの窓に薄暑光　たか子

二〇二二年六月一四日

五月雨や和本を綴る絹の糸　ひのと
鳴き龍の声木霊して堂涼し　あられ
群れを解く海猫のゆくへや島青し　ひのと
山寺へ一本道や夏木立　もとこ
禅寺の木立を抜ける風涼し　あられ
金剛杖かくも短し夏遍路　智恵子

二〇二二年六月一三日

ほうたるの恋を邪魔せり月明り　うつぎ
走り来て汗も香となる吾子笑顔　素秀
くちなしの香や曇天の夕間暮れ　なつき
蛍火をよすがに歩く谷戸の旅　むべ
宴の灯果てて蛍の静寂かな　凡士
再会を祝ふグラスの音涼し　澄子

二〇二二年六月一二日

用水路馳せる水音や青田風　こすもす
じやがいもを掘る子がはじくだんご虫　なつき
乱れ打つ気迫の太鼓夏舞台　たか子
夕焼を浴びてはかへす水車かな　ひのと

二〇二二年六月一一日

昇神の声高らかに山開き　みきお
山葵田の水に逸りし水車かな　凡士
打水に打たれに来たる男の子かな　ひのと
紫陽花の異種を愛でつつ雨の苑　そうけい
川沿ひに咲く夾竹桃爆心地　みきお

毎日句会みのる選・二〇二二年六月一九日